論　文

ポストモダン社会における消費対象としての動物

―商品としての猫を巡って―

東　　美晴

1．序論

（1）　現代日本における猫を巡る状況

「pepy」は「ペットライフを楽しくする情報メディア」と銘打ったインターネットメディア運営会社である。その「pepy」の2015年11月26日付の記事は「猫の種類は？人気ランキングトップ10と性格，値段まとめ」である。この記事を発信する目的は「純血種の猫を飼うメリットはその特徴や性格など，成長の様子がほぼ予測がつく」からであり，「ライフスタイルにあった猫選び」を考える補助的情報の発信にあるらしい。その1位から10位まではスコテェッシュフォールド（10万～20万円，垂れ耳であるほど高値が付く傾向にある），アメリカンショートヘア（10～15万円），ラグドール（15万円前後），ブリティッシュショートヘア（12万円前後），ロシアンブルー（10万円前後），マンチカン（15～20万円前後，足が長いと安くなる傾向がある），ベンガル（10万～30万円，模様がきれいなほど高値が付く傾向がある），シャム（15万円前後），シンガプーラ（15万円程度），オシキャット（10万円）と並んでいる[1)]。

「animol」も「pepy」と同様のインターネットメディア情報会社である。「animol」は「ペットとの生活・動物と人との繋がりを，より豊かにするための情報を発信しています」としており，やはり2015年３月22日には「【最新版】猫の種類別人気ランキングTOP10は？」という記事を出している。この記事によれば，１位～10位は，スコティッシュフォールド，アビシニアン，ラグドール，アメリカンショートヘア，ロシアンブルー，マンチカン，ソマリ，メインクーン，ノルウェージャンフォレストキャット，トンキニーズと続く[2)]。

１）『pepy』http://pepy.jp/900，2015年12月22日接続

２）『animol』http://animo-animal.jp/artives/322，接続日2015年12月22日

どちらのホームページにも，どのような方法で抽出されたランキングかが明示されているわけではない。ただ，血統書が付けられる猫種をランキング形式で紹介しているだけである。これらの記事は，いつかは猫を購入したいと思っている人に対する商品紹介なのであり，商品としての猫の価値はまず血統によって裏付けられるものなのである。

一方，野良猫は捕獲され，保健所に送られねばならない猫として認識される。たとえば，ホームページ楽天市場の「アニマルキャッチャーM型（捕獲器）」の紹介には，「購入２年後の追加レビューです。実家と新築の我が家で捕獲合計55匹を超えました。…。全く野良猫ちゃんを見なくなりました。糞尿害は一切ありません。ゴミあさりも発情期の鳴き声もありません。非常に快適に生活できています。ご近所トラブルになる前にジャンジャン捕獲しましょう」のような購入者のレビューが載せられている[3)]。また，自治体側も積極的に捕獲はしないが，繁殖を抑制するための条例を制定するケースもある。俗に餌やり禁止条例と呼ばれるものであるが，京都市のように既に可決された市町村もある[4)]。この問題に対し，千葉県のように餌やりそのものを禁止するのではなく，地域で野良猫を地域猫として適切に管理する地域猫活動を推進することで対処する自治体もある[5)]。

千葉県の『地域猫活動に関するガイドライン』では，地域猫を「地域の理解と協力を得て，地域住民の認知と合意が得られている，特定の飼い主のいないねこのこと。その地域にあった方法で，管理者を明確にし，対象となるねこを把握するとともに，餌やふん尿の管理，不妊去勢手術の徹底，周辺美化など地域のルールに基づいて適切に管理し，これ以上数を増やさず，一代限りの生を全うさせる猫を指す」としている[6)]。要するに地域猫は，地域住民が適切な管理を行うことを前提に，野良猫ではなく，地域猫という名称を与えられた猫を指すことになる。

以上の状況をまとめると，現代日本において，猫は適切に管理されねばならないものと捉えられている。保護主体のない野良猫は迷惑な存在であり，捕獲されることも当然のこととみなされる。旧来の野良猫を野良猫として地域に残すには，地域猫活動等，住民団体が保護主体となり適切な管理を行うことが求められる。その一方で，当然適切な飼養を前提としてペットショップ等で販売される血統の正しい猫は，それなり以上の高額商品である。

3）『楽天市場』http://review.rakuten.co.jp/item/1/202225_10000304/lia2-h4us8-9ytaa_177841046/，2015年12月22日接続

4）「野良猫の不適切な餌やり禁止条例成立　京都市」朝日新聞デジタル，2015年３月20日，http://asahi.com/articles/ASH3M7W7KH3MPLZB024.html，2015年12月22日接続

5）千葉県は2010年３月に『人とねことの共生ガイドライン』を作成し，さらに2012年３月には『地域ねこ活動に関するガイドライン～地域ねこ活動の道標～』を作成している。

6）千葉県『地域ねこ活動に関するガイドライン～地域ねこ活動の道標～』2012年３月，参照。

さらに新しい状況も生まれている。猫は身近な存在ではなく，見に行くものにもなりつつある。そのような場所として登場したのが，一つは展示施設としての猫カフェである。もう一方に，猫島と呼ばれるような猫が多く棲息する島がある。猫島の猫の管理については，それぞれに異なる。最も早い時期から猫島として知られている宮城県石巻市の田代島の場合は，すでに猫が重要な観光資源とみなされ，エサやりなどの管理が行われている[7)]。2013年頃からメディアに登場するようになった愛媛県大洲市の青島の場合は，特別な管理は行われていないようである[8)]。

猫島観光は，写真集や猫雑誌からはじまり，ネット上で紹介されるのみならず，観光ガイドブックが刊行されるなど，すでに新しいテーマ観光として定着しつつある[9)]。観光対象としての猫島は，猫の管理の有無に関わらず，人の営みの側に普通に猫がいる風景，すなわち猫と人間との共生の風景が急速にノスタルジックなものになりつつある。そこで，そのような幻想をかきたてる場所（サンクチュアリ）がクローズアップされることになり，生まれてきたものであろう。

以上をまとめると，現在の日本において自然と人の生活の境界上を自由に行き来し，

7）田代島では，震災による津波被害に対する復興プロジェクトとして，社団法人田代島にゃんこ共和国による「田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト」が行われている。このプロジェクトは「かき養殖の資金募集を中心とし，その他に島内設備，猫の世話，団体運営の費用等」の資金を集めるための一口支援基金プロジェクトである。なお，田代島にゃんこ共和国の設立目的は「一般社団法人田代島にゃんこ共和国は，主たる事務所を宮城県石巻市田代島の島内に置き，田代島の宝である猫を通じて田代島の災害復興，観光促進事業を行い，猫による田代島の更なる島興しに寄与することを目的としています」とされている。
『田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト』http://nyanpro.com

8）2013年11月11日付の『週刊朝日』のネット記事「住民15人に猫100匹！猫好きが悶える猫島」には「商店はもちろん自販機さえないこの島が，突如，注目を集め始めたのは，今年９月。インターネットで紹介されたのをきっかけに，全国から猫好きがやってくるようになった。島民は猫好きが半数・猫嫌いが半数。「でも，なんとなく共存してきた」と少々困惑気味だ。猫たちは，もらえる餌はもちろん積極的にいただくが，基本，以前と変わらず「ワイルドな生活」を送っている。釣果のアジを失敬して，釣り客と追いかけっこ。時には逃げ損なって海に転落。「犬かき」ならぬ「猫かき」で返ってくる、なんて光景も。もうすぐ冬の到来だ。寒くなれば淘汰され，春になると子が生まれる。自然の掟で「適正数」が維持されているという」と記述されている。http://dot.asahi.com/wa/2013110800030.htmi，2015年12月22日接続

9）『ニャンクチュアリ　猫町，猫島，猫神社　猫の聖地を巡る旅』，『日本全国猫島めぐり　のんびり猫旅』のような観光ガイドブックも既に刊行されている。
佐藤ピート，2013年『ニャンクチュアリ　猫町，猫島，猫神社　猫の聖地を巡る旅』イースト・プレス。南幅俊介，2015年『日本全国猫島めぐり　のんびり猫旅』主婦と生活社。

人と共生する動物としての猫が急速にいなくなり，徹底的に管理され，人の生活に従属させられる存在としての猫のみが存在を許されるような変化が進行しつつある。このような猫（動物）の変化は，人の側の感性の変化によってもたらされるものであり，既に犬において起こってきたことである。犬の位置づけの変化は社会そのものの近代化，すなわち近代的で衛生的な都市を現出させるという動きと大きく関わる。猫の場合は，犬と同様の変化が今現在進行中であるという点で，社会のポストモダン化との関わりにおいて捉えるべきであるのかも知れない。猫島観光の対象となる猫，商品として流通させられる猫等，それぞれに対し，個別のアプローチが必要であることは言うまでもない。しかし，本稿では商品として流通させられる猫を中心に，まず考察を試みることとする。

（2） 動物と人間の関係を考えるにあたって

現代日本の猫を巡る状況を考えるにあたって，まず社会学およびそれに関連する領域のペットを中心とした動物を巡る議論を整理しておく。

①日本の社会学と動物

日本における社会学領域において，動物，とりわけペットと人間との関係に言及した著作は必ずしも多くない。その中で比較的よく知られているのは，2004年に刊行された山田昌弘の『家族ペット　やすらぐ相手はあなただけ』であろう[10)]。現代日本においてはペットが重要なパートナーであるという，単独世帯が増加しつつある（平成22年の国勢調査では全世帯数のうち32.4％を占めていた[11)]）家族のあり方の一断面を照射した著書として注目を集めたものであった。

山田の著作以外に，社会学領域における動物と人間の関係を扱った著書としては，真木の『自我の起源　愛とエゴイズムの動物社会学』，ましこの『愛と執着の社会学　ペット・家畜・えづけ，そして生徒・愛人・夫婦』があげられる。

1993年に刊行された真木悠介の『自我の起源　愛とエゴイズムの動物社会学』は，「社会学」という用語は用いられているが，むしろコンラート・ローレンツ等のエソロジー（動物生態学）の系譜の中にある著書である。人間社会の起源や，人間の多様な行動の起源の研究として，動物集団のあり方の研究は行われてきた。この書も動物集団，動物の行動等の研究から，人間存在にせまろうというものであった[12)]。

10）山田昌弘，2004年『家族ペット　やすらぐ相手はあなただけ』株式会社サンマーク出版。2007年には文庫版として『家族ペット　ダンナよりもペットが大切!?』が文春文庫から刊行されている。

11）総務省，2011年，平成22年度国勢調査最終報告書『日本の人口・世帯』p281

12）真木悠介，1993年『自我の起源　愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店

2013年に刊行された，ましこひでのりの『愛と執着の社会学　ペット・家畜・えづけ，そして生徒・愛人・夫婦』は，ペットへの愛着，執着（すなわち支配）を核として，動物としての人間の本質を問うというものである[13)]。この書はイーフー・トゥアンの『愛と支配の博物誌　ペットの王宮・奇型の庭園』から想を得たものと推察される[14)]。そこで，トゥアンによる人間とペットとの関係に関する記述を示しておく。

> 人間というものを理解しようと思えば，まず力（パワー）がどんなものか考えなくてはならないだろう。…。一方，愛はれっきとした社会的事実ではないか？では，その愛の社会における役割は何か。…。社会学関係の書物では，情熱，欲望，強迫観念などの用語を使う。これらの用語が表現しようとする人間心理は，力と支配の概念でまとめることができそうだ。あきらかに情熱や欲望は，たとえば，聖パウロが「コリント人への手紙」第１章で使っている愛という言葉が意味するものとは別物である。…。この愛を除外したとしても，まだ愛情というものがある。これなら確かに存在するし，この世の営みに欠かせない要素でもある。だが，愛情は支配欲の対極にあるのではなくて，むしろ支配という行為の鎮痛剤と言っていい。愛情は人間の顔を持つ支配欲だ。支配が温かさのかけらもない残忍で搾取的な行為である場合，「犠牲者」を生む。ところが支配と愛情が結びつくと，そこに生まれるのは「愛玩物（ペット）」である（トゥアン，1988：14-15）。

②日本社会の近代化と犬

1996年に刊行された今川勲の『犬の現代史』は，日本における近現代の犬をめぐる状況について明らかにした先駆的な著作であろう[15)]。この著書において，今川は軍用犬，狂犬病，動物愛護運動の３つの観点から，犬をめぐる歴史を記述している。2014年に刊行された仁科邦夫の『犬たちの明治維新　ポチの誕生』は，幕末から明治にかけての社会変動の中で，犬を巡る状況も変化する。この時期に焦点を当て，犬の歴史をまとめたものである[16)]。

一方，2009年に刊行されたアーロン・スキャブランドの『犬の帝国　幕末ニッポンから現代まで』は，犬を通して人間のあり方を照射するという形で，日本の近代を描いた著書である[17)]。

13）ましこひでのり，2013年『愛と執着の社会学　ペット・家畜・えづけ，そして生徒・愛人・夫婦』三元社，参照。

14）イーフー・トゥアン，1988年『愛と支配の博物誌　ペットの王宮・奇型の庭園』片岡しのぶ他訳，工作舎，参照。

15）今川勲，1996，『犬の現代史』現代書館，参照。

16）仁科邦夫，2014年『犬たちの明治維新　ポチの誕生』草思社，参照。

アーロン・スキャブランドの『犬の帝国　幕末ニッポンから現代まで』には，現代におけるペットと人間の関係を考える上で重要な指摘がいくつかある。ここではそれを挙げておく。

スキャブランドの議論における一つの重要なポイントは，ヨーロッパ世界の啓蒙時代に生まれた，文明化するとは文化と自然の間にはっきりした区別をつけることであるという発想が帝国主義の拡張とともに世界中に広がり，日本等のアジア世界にも影響を与えたという点である。文明化するために文化と自然の間にはっきりした区別をつけることは，衛生的で近代的な都市建設の一環として，そこから不衛生なもの，近代的秩序に縛られないものを排除していくことにつながる。日本においても野良犬および野良犬と同等とみなされる所有者が曖昧な町内等で共生する犬の徹底的な排除として現れる。以下は，この文脈のスキャブランドによる説明である。

> 19世紀における日本や他の地域に昔からいる犬の住環境が示すように，人間たちは古来，家畜であれ，野生化したものであれ，野生の動物であれ，多くの人間以外の動物たちとしばしば町や村で共存生活を送ってきた。今日の世界では，動物たちが主に人間たちの暮らす地域からおおむね追い出されてしまっている。これはむろん都市化と経済変容の結果なのだが，歴史家のキース・トマスも論じるように，それはまた文明化するとはどういうことかをめぐる人々の感じ方から強い影響を被ってきた。文化と自然とのあいだにはっきりした区別をつけなければならないという考え方は啓蒙主義の時代のことで，それが帝国主義の拡張とともに世界中に広がり，多くの動物が都市景観から消えていく。過去２世紀間、人々は世界の多くの地域で野獣を排除するか―殺したり，いわゆる「自然保護」区に囲い込むことによって―あるいは完全に飼いならして食物資源とか他の生産品として商品化するか，ペットにするかしてきた。多くのイヌ科動物にとって，こうしたプロセスは人間の伴侶として飼い犬となるか，あるいは人の手で撲滅されるかのどちらかであるほかなかったのである（スキャブランド，2009：78）。

また，野良犬およびそれと同等の犬の排除においては，犬を文化的な犬と非文化的な犬の２つに分類することによって行われた。それはスキャブラントによると，以下のようになる。

> 犬は飼い犬の状態と野生の状態とのあいだをさまよう傾向があるために，文化と自

17）アーロン・スキャブランド，2009，『犬の帝国　幕末ニッポンから現代まで』本橋哲也訳，岩波書店

然の二項対立において曖昧な位置を占め，人の支配する領域の内外に同時に存在してきた。19世紀の植民者たち，それに日本や他の場所で西洋人の犬飼育法を受け入れた現地のエリート階級は，特定の犬が助手，護衛，伴侶として，「役にたつ」と考えて価値をおいた。そうした犬は完全に手なずけられ，主人である人間の命令に絶対服従することを期待された。…。同様に19世紀の帝国や現地出身の支配者たちは，町や田舎を彷徨し，人間の権威にほとんど何の忠誠心も尊敬も示さぬ野良犬や野生化した犬，野犬の振舞いをほとんど許容しなった反面，これらの動物のほうでもしばしば見慣れぬ服装をした外来者には最大の敵意をもって応じたように見える。忠誠と思われた飼い犬はその文明化された性質の印であるとみなされて尊重される一方で，人間の支配と所有の外にさ迷い出し文化と自然の境界の明らかでない犬は撲滅された。そうした犬をオオカミ，雑種，あるいは狂犬だと想像することで，殲滅が正当化されたのである（スキャブランド，2009：78-79）。

そこで，スキャブランドはまず，日本における文化的犬と非文化的犬との分類の様子を，仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』（1870年）に載せられた挿絵を例として言及している。

この本は明治時代初期に西洋文化が導入されて起きた混乱をユーモラスに描くが，その挿絵の多くに犬が描かれ，その格好が所有者の格好と似ているところが面白い。姿勢の悪い日本の庶民が小汚い野良犬か小さな丸々とした子犬の隣にいるかと思えば，颯爽とした西洋風のエリート階級がほっそりとして手入れの行き届いた西洋犬を連れているといった具合。スマートな西洋犬と描かれる日本人は，裕福そうな威厳ある髭の「紳士」で西洋のコートと山高帽に身を包み，片手でステッキを持ち，もう片手で犬の革紐を持っている。この男が見た目にも比喩的にもいちばん背が高く，そこから右から左へと２頁にわたって描かれた３人の男たちは日本人の「文明」への進歩の階梯を表している。一番右側の男が「未開の人」と称されて伝統的日本の典型，頑固そうな二本差しの侍で，髪の毛はちょんまげで羽織，袴に草履といういでたち，手には閉じた扇子と腰に日本の刀。隣の絵が真ん中にいる男で和洋折衷の装いで，「半開の人」を表し，装束は侍と同じで和服だが他の装身具は明らかに西洋のものだ。ヨーロッパ風の靴を履き，黒いつばの狭い帽子をかぶってそこから短く刈った髪の毛がのぞき，左手には西洋風のカサを持ち，右手で懐中時計を差し出している。このふたりの「開化」度の足りない男がいちばん左の「紳士」のほうを向いているさまは，まるで左側の男が「文明化する」日本の未来像を示唆するかのようだ。西洋犬の存在がこの男の洗練されているらしい地位を証するかのようで，どうやら３人のうちの彼だけがそんな犬を持つ資格があるということらしい（スキャブランド，2009：83-84）。

こうして文化的に正しい犬と正しくない犬の分類ができあがると，次は文化的に正しくない犬の排除が始まる。このためには狂犬病の脅威の言説が用いられるとともに，現実に犬を駆除していく最初の動きを創り出したのは，政府等の外国人顧問たちであった。その状況をスキャブランドは以下のように記述する。

> 1870年代以降，明治政府は狂犬病の脅威と，家畜および狩猟スポーツへの有害性と，日本に昔からいる犬とオオカミへの文化的忌避感の高まりを捉えて，政府の方針に利用した。『ジャパン・ウィークリー・メール』にも表されているように，明治政府と政府の外国人顧問は公式の者も自己任命も含めて，育ちの悪い土着の「駄犬」を最大の脅威と見なした。かくして日本から狂犬病を根絶し，田舎からいわゆる害虫を除去し，街を文明化するという，半世紀あまりにわたるキャンペーンの矛先が向けられたのは，日本に昔からいるイヌ科動物だったのである。外国犬は西洋人や地域の上流階級と同一視されていたがために，この運動の攻撃を免れた。1880年代終わりには，山形県の自然史家松森胤保（1825-92）が書き記しているところでは，「近時外方の種を伝えいたるところ往々これり。しかれども旧物にあらず。かつその無数なるをもってこれを遇せず。これを遇して王政以来つとめて和犬を殺す…」とある（スキャブランド，2009：88）。

日本政府にとって良き前例となったものであるが，犬の駆除をリードした外国人顧問の取組は，現代の私たちの目からみると凄まじいものがあった。千葉では，1873年から79年まで日本に滞在し，下総牧場での羊と乳牛の飼育の監督を任された明治政府の顧問，アメリカ人のD・W・アップ・ジョーンズが犬の殺害を推し進めた。ジョーンズは「下総全域にわたって犬を根絶するように県に要請」し，「千葉県は即座に牧場の近くに住む犬を根絶することに協力する人々に報償を与える策を導入し，次の10年間で毎年この地域では1200匹以上のイヌ科動物が殺された」という。もちろん，「それらの犬のなかには西洋の血をひく犬はほとんどいなかった」という（スキャブランド，2009：89-90）。一方，北海道ではエドウィン・ダンが犬の殺害を推し進めた。エドウィン・ダンは1873-83年の間，北海道開拓使によって雇われ，４つの拡大実験農場の監督を任されていた。

> ダンは，家畜，特に馬と羊を襲うイヌ科動物の根絶に力を尽くした。開拓使がそのために使ったのは二つの方法，つまり報奨金制度と，ダンが後に自慢するところによれば「島全体の生き物すべてを毒殺するのに十分な」量のストリキニーネだった。根絶対策の目標となったのは狼だけだった。……。しかし開拓使の報告を調査して明らかになったことは，実際ターゲットとされて殺されたイヌ科動物の大半はオオカミだけではなく，島の先住民族アイヌが飼っていた犬であったという事実だ。これらの犬に

オオカミ，野犬，悪犬，狂犬というラベルを貼ることが，虐殺に都合のよい口実を与えたのだ（スキャブランド，2009：91）。

これ以降，日本政府も犬の駆除に本格的に取り組んでいく。それは以下の通りである。

病気の伝染を懸念し，また衛生促進に心を砕く地方や中層の政府官僚たちは，1870年以降，犬撲滅運動の拡大をはかるために法律を改定して，警察に仕事を任せるのではなく誰にでも感染した犬が殺せるようにした。多くの行政団体が千葉や北海道の先例に従って，町や田舎をうろついて捉えられたどんな犬の皮にでも賞金を出すようにして，病気にかかっていない犬まで駆りあつめ始めた。進取の気性のある者たちにとってこれは儲かる商売で，２，３人でいっしょにやれば１日に100匹や200匹の犬は容易に殺せたから，かなりの収益が得られたわけだ。同時期に東京ではじめて犬を取り締まる布告が出された。この条例によって飼い主の責任が決められ，犬に首輪と所有者の名前と住所を書いた畜犬票をつけることが義務化される。この法律によって，飼い主はその犬が狂犬病にかかった場合，さらに病気であろうがなかろうが人を噛んだり傷つけたりした場合には殺さなくてはならないことが定められた。こうした措置は登録されていない犬の根絶を認める諸規則によって，しばしば裏付けられることとなった（スキャブランド，2009：99）。

しかし，日本国内の野良犬の除去は，農村部では簡単には進まなかった。スキャブランドは柳田國男の回想を引いて，昭和初期頃の様子を示している。

政府の規制による野良犬除去対策は，日本に昔からいる犬に限られてはいなかったが，とくにそれが標的とされていた。町や村のはずれに住みつきそうなイヌである可能性がもっとも高かったからだ。行政当局の期待にもかかわらず，こうした新しい法令は人と犬の関係がもともと共生的であった町内や村々では，両者の関係を大幅に変えることにはならなかった。犬の排除に向けた政府筋の努力にもかかわらず，そのような人間と犬とのあいまいな結びつきは少なくとも20世紀初頭までは，とくに田舎では継続していた。柳田國男の回想によれば，兵庫県の彼の故郷の村ではつねに４匹か５匹の犬が徘徊しており，それなりに与えられた食べ物を食べ，どこでも寝られるところで寝ていたし，見たところ犬を飼っていた家は一軒もなかったという。たとえ誰かが特定の犬を好きになって特別な親愛感を抱いたとしても，新しい法令が定めたように犬に首輪とか登録札をつけて責任を負うことなどは思いもよらなかったろう（スキャブランド，2009：100）。

21世紀現代の日本において，野良犬はほぼ撲滅されている。現代の私たちは野良犬などいる筈がないことを前提に日本の都市景観を捉えており，それをごく当たり前の前提としている。しかし，スリランカ等では，現在でも野良犬も野良牛も当たり前に町なかにいる。その光景の背景として，輪廻転生を重視する小乗仏教思想のために極端に生き物に対する殺生を忌む傾向がある文化であることも考慮しなければならない。だが，そのような文化的な伝統性を切り捨てて近代化を目指すとき，動物のいない清潔な都市景観が実現する。現代日本の野良犬などいる筈のない都市景観は，1870年代以降取組続けられてきた野良犬除去と飼い犬の管理政策によって，衛生的で近代的な空間として確立されてきたものなのである。今や日本の都市部の犬は，より文明化され，ファッショナブルな衣装さえまとわされている。

③イギリスにおける動物の社会史研究

スキャブランドの研究は，啓蒙時代のイギリスにおける動物のあり方に関する研究の延長線上にある。スキャブランドの発想に最も刺激を与えた先行研究はハリエット・リトヴォの『階級としての動物　ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』である[18)]。19世紀のイギリスは人の動物に対する認識を大きく変えた時代である。ハリエット・リトヴォは，動物に対する多様な言説の分析を通し，「人間と動物の関係の歴史だけでなく，さまざまな人間集団同士の関係の歴史」をも明らかにすることを目論んだ（リトヴォ，2001：12）。

すなわち，イギリスで記録に残る最古の法では「動物は人間のもつ権利と義務を暗に賦与されていた。ゲルマン法の贖罪金の賠償額は一家の成員すべてに設けられており，女性や農奴だけでなく家畜もこれに含まれていた」という。この法典によって，動物が法廷で証言することが許されてもいた（実際には，権利を侵害された家長の申し立てを強めるものであるが）し，動物に死刑が宣告されることもあった。しかし，19世紀には動物に死刑を宣告することはなくなった。これは，「19世紀のイングランド法では，動物は飼い主の所有物に過ぎず，（動物ほど動くことがない）動産と大差ないものと見られていた。従って，もはや動物たちはみずからの行動に対して道義的責任があるとは考えられなくなった。そのかわりに，動物と出会う人や所有する人が，動物が人や財産に与えるかもしれない危険を予測して，それに応じて行動する責任を負うようになった」という変化による。このような動物の法的役割の制限は，「人間と動物の関係が根本的に変化したことの現れ」であり，これによって「かつて動物が持つとされていた力を，人間が組織的に我がものにしたし，動物は何よりもまず人間の操作の対象として重

18）ハリエット・リトヴォ，2001『階級としての動物　ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』三好みゆき訳，国文社

要」となるに至る。この変化は18世紀後半から19世紀前半にかけて起こり，その要因は「大部分は，啓蒙思潮と結びついた新しい知識獲得法と応用法の結果」であったという。つまり，この時代の初めには，自分たち人間は「自然力のなすがままだ」と考えていたのが，この時代の終わりには「科学と工学によって，自然は人間の支配をうけやすく」なり，「提喩あるいは隠喩によって，動物は自然力を象徴することがあるので，自然力の脅威が減るについて，動物そのものも脅威でなくなっていった」のである。さらに，「現実の次元においても，畜産業や獣医学や武器技術といった分野の進歩によって，現実の動物たちはますます扱いやすくなった」ためであるという[19]。

こうしてイングランドにおいて人が動物になげかけるまなざしは以下のようになる。

> 自然がたえざる敵対者ではなくなってしまうと，自然は愛情をこめて眺められるようになり，天秤が人間の側に傾くにつれて，郷愁の念さえこもるようになった。こうして，個々のペットにも下等な被造物全般にも―「下等」とはヴィクトリア時代のひとびとが常套的に用いた限定詞である―感傷的な愛着をもつことが19世紀前半までに広まった。こうした新しい事態は文学や美術にも反映していて，きわめて秩序だった美学原理にとってかわって，不規則や束縛のなさを高く評価する美学原理が主流となった。野生は醜悪ではなく魅力的なものになったし，野生動物は農夫やエキゾチックな外国人と同様に―野生動物はこうした人たちと同類視されるようになっていった―軽蔑よりも同情をかき立てることもあっただろう（リトヴォ，2001：11）。

そして，「坑夫たちが競争させるホイペット犬は，もっと上品な狩猟愛好家が競争させるグレイハウンド犬とは違う犬だ」と考えられたり，「猫を趣味で飼うようになったころ，ほとんどなんの値打ちもない迷い猫が，たちどころにキャットショーに出す価値のある猫に変身」したり，「ブリテン島のなかで獰猛な野獣が絶滅することを喜んだのに，輸入された猛獣を見ようと群がった」り，といったことが起こってくる（リトヴォ，2001：12）。このような現実に対し，リトヴォは，第１部の「威信と血統」において牛の飼育とドッグショーをめぐる言説から階級的優位性の主張を補強する言説のあり方を読み取り，第２部の「危険な階層」において動物愛護主義と病気に関する言説から社会の規律の維持にまつわる不安を読み取り，第３部の「動物と帝国」において動物園の管理と狩猟に関する言説から大英帝国の事業の正当化と賛美を読み取るという作業を行っている[20]。

第２部の「危険な階層」は，「同情のしかた」「犬にきをつけろ」の２章に分かれており，「同情のしかた」では動物愛護運動の出現を，「犬にきをつけろ」では狂犬病神話と

19）同上書，p9-12

20）同上書，p13-4

それに衝き動かされ犬の取締りを行っていく当時の社会の様子，およびそれに関する論争等が詳細に述べられている。スキャブランドが明治期に始まる日本社会における狂犬病のレトリックを利用した野良犬の駆除をまとめる上で，大きな影響を与えたことが読み取れる。

なお，同じくイギリスのヴィクトリア時代の動物愛護運動を論じたものとしては，ジェイムス・ターナーの『動物への配慮　ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』がある[21)]。

ここでは本論との関係上，リトヴォの議論の中でのペットとしての犬の愛好がどのように始まったかと，様々な犬種が作りだされる過程についてまとめておく。

リトヴォによれば，「英国人は有史以来犬を飼ってきたが，たいてのヴィクトリア時代の愛好家とその飼い犬との関係は，純粋に犬を伴侶として楽しむために飼うものであって，これはかなり新しい現象，とりわけ社会の最上層以外ではかなり新しい現象」であるという（リトヴォ，2001：126）。「一般市民の間でペットの飼育が上品な趣味になる」のは，「18世紀末にひとびとがやさしい感情に寛大になっていったこととある程度まで軌を一にしており」，19世紀はじめまでには，ペットへの愛着のような感情を吐露しても「非難や嘲笑を受けるよりも，広く共感をもって迎えられることが多くなり」，19世紀半ばにはヴィクトリア時代のペット熱が確立し，「ペットに食卓で食事をさせたり，きちんと服を着せたり」といった愛犬家の愚かしさが風刺されるほどになっていたという（リトヴォ，2001：127-8）。

ただ，中産階級におけるペット熱の高まりは，犬そのものから，首輪やブラシ，犬用パン（今で言うペットフード），犬関連の書籍まで，企業家に多くの商売のチャンスを提供したという（リトヴォ，2001：128）。また，ペットとしての犬そのものの値段もどんどん高騰していった。それは，「可愛がられる犬そのものにも目をみはる値札がついており，その値段は犬の愛好が盛んになるにつれて高くなった。実際，ヴィクトリア女王の犬舎の世話をしていた獣医チャールズ・ロザラムは，1865年ごろから1887年ごろにかけてロンドンの犬の頭数が確かに増加した原因は，純血種の犬の価格が雪だるま式に高騰したことにあると見た。そしてまた，ある愛好家向けの雑誌は，「近ごろの高値」は「犬の進歩」の現れであると述べた。1891年までには，ドッグショーで最優秀になったコリーやセントバーナードは1000ポンドで売れたし，値上がりを期待する買い手は，入賞したフォックステリアに375ポンド，卓越したキング・チャールズ・スパニエルに250ポンド出したのであった」という（リトヴォ，2001：129）。但し，「普通によくある犬種で，純血種であるが特別すぐれていない犬ならば，はるかに安い値段で―ペットに

21）ジェイムス・ターナー，1994『動物への配慮　ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』斎藤九一訳，法政大学出版会

しかならないものなら3ギニーで，いちばん競争の緩いドッグショーで入賞できるほど「十分完璧」なら最低10ポンドで―入手できた」ともいい，これほど綿密に金額が記録されてきた動機を「犬の地位というよりむしろ飼い主の地位である。中流階級のペット飼育には心情的な根源があったのは確かだが，ある似通った動機が影を落としていた部分が大きい。結局のところ，役に立たない動物を飼うことは上流階級から拝借した習慣であり，上流階級への同化をめざす換喩的な試みのひとつ」であり，社会的上昇の野望のレトリックに犬を組み入れることであった（リトヴォ，2001：130）。

当初，愛玩犬に関心を集中する中流階級の愛犬家に対し，それ以前から狩猟を趣味として猟犬を愛好してきた貴族階級からは批判があった。しかし，ドッグショーの基準に，セッターやポインター等の猟犬向けには野外競技を課すことで，王室をはじめとした上流階級もドッグショーへ参加していく。その結果，19世紀後半の犬の愛好はもともと中流階級の上流階級への同化への試みとして始まったものだけに，「エリートが愛好するとその犬種の評価が急上昇する」ことも起こった（リトヴォ，2001：130-133）。それは「ヴィクトリア女王の愛好したコリーは，そうしたひいきの恩恵をいちばん明らかに受けた犬だったし，君主の好みはポメラニアンを広めるのにも力があった。パグは19世紀中はながらく人気が低迷していたけれども，「ウィラビー卿の保護のおかげ」とその他の貴族階級の賞賛者のおかげで人気を回復した」という（リトヴォ，2001：133）。

なお，「ドッグクラブの多くが，会費も安いが特典も少ない，さほど身分のよくない愛好家むけの外郭団体を後援」し，「同じように，労働者階級を対象とした特別部門に出場する犬には登録料を割り引きするドッグショーもあった」というように，ドッグクラブやドッグショーなどの犬の愛好の組織そのものが，社会階級を反映する形で組織化されていた。そのため，「純血種の犬でさえ下の階級の犬と付き合うとその立場を危うくする」ことになり，純血種ではない犬は雑種犬としてくくられた。雑種犬は「犬の仲間がその責めを負わされているすべての危害の90パーセントをおこなっている」，「血統の卑しい犬は老いぼれると非常に汚くなることが多い」等と論評されており，リトヴォはこれらの言説を「「役立たず」で「みじめ」で，要するに「くず」に他ならないのである」とまとめている（リトヴォ，2001：135）。

ところで，階級幻想の源となる血統登録された純血種の犬の概念そのものもまた幻想に満ちたものである。リトヴォによれば，「犬種は，どちらがより優秀かを判定できるようなカテゴリーを作り上げるために，何度も何度も分割された。各犬種のファンは，繁殖家が努力目標とすべき理想の犬を規定する一連の項目を作り上げ，こうした理想像がドッグショーで公に承認され強化されるのであるが，そこではめまいがしそうなほど多種多様の部門が提示され，そしてそのなかから，犬種の下位区分の部門でさえ入賞できない犬から全体の最優秀犬にいたるまでの，入念に等級のついた犬のヒエラルキーが抽出されたのである。この制度は，生物学的な必要に則り，数世紀にわたるイングラン

ドでの犬の繁殖の歴史をふまえた，確実で安定したものに見えたけれども，実のところ，それは意志と想像力を集団でめざましく働かせることで生まれたものである。犬愛好の基本カテゴリーである犬種さえ，比較的最近になって作られたものだった。上流社会のひとびとは何世紀にもわたって小型愛玩犬を愛撫し，猟犬のあとを馬で駆けてきただろうが，こうした昔の犬と，血統が良くて十分な証拠書類のついた19世紀後半のペットとの間の関係を示す証拠はほとんどなかった。ヴィクトリア時代の愛犬家たちが理解していたような意味での犬種と言う概念そのものが―同一の犬種同士で交配するなら確実に同じ子犬が生まれるような，一定の身体的特徴を備えた亜種もしくは品種というものが―比較的新しいものだったかも知れないのだ」としている（リトヴォ，2001：138）。

④ヴィクトリア時代の猫の愛好

本稿の中心は現代日本の猫である。そこで，序論のまとめとして，リトヴォの議論を借りて，猫愛好の制度化についてまとめておく。

ヴィクトリア時代における猫の愛好は犬よりも後発である。ただ，犬にはその内部に大きさや姿形，運動能力等において大きな差異があることに対し，猫には被毛以外に大きな違いはない。さらに，猫の繁殖は，犬の繁殖が「決められた相手を喜んでつがうのが普通」であることに対し，「自分勝手に相手を決めて，飼い主の見ていないところで実行する習性」をもっているために，そのコントロールが難しい。それでも，猫の種類と血統のシステムを創り出し，キャットショーが行われてきた（最初のキャットショーは1871年，クリスタルパレスで開かれた）。当初，分類は「三毛，三毛と白，茶のぶち，赤茶，赤茶のぶち，赤茶と白のぶち，まだらのぶち，黒と白，黒，白，珍しい色，その他」という被毛の色による分類が提唱されたが，キャットショーに出展される猫のほとんどが珍しい色とその他に分類されてしまうために，この分類はすぐに意味をなくす。次にて出来たのはもっと多種多様な色をあげ，性別と年齢，長毛種・短毛種の区別（主として長毛種はペルシャ猫等の輸入猫，短毛種はイングランドの在来種）であった。さらに目の色が重要視されるようにもなった。また，ランク付けにおいて重視されるのは希少性であった。それは，「赤茶の猫はたいてい雌だということから，雄の三毛猫が望ましいと考えられ」，「黒猫には茶色の目がめったにないという理由だけで，それが必要とされ」，「いちばんよくある黄色の目は低級さのしるしとして中傷された」という具合であったという。その結果として「愛猫家は，犬たちが例証して見せた多種多様な身体を猫のなかで再生産することにかけては，それほど成功」しなかった。しかし，愛猫家は「応用動物学のレベルで解決できない問題」を，「投射と空想の働き」を用いて，「レトリックというもっと高次のレベルから攻めた」のである。すなわち，「猫の種類の大半は生物学的に作られたものではなく，言葉によって作られたもの」なのだという[22]。

リトヴォのこの議論に従うならば，現在の私たちが，それがあることを前提にしてい

る猫種とは「あってないようなもの」ということになってしまうのである。

2．猫種を作る

タムシン・ピッケラルによる『世界で一番美しい猫の図鑑』には，血統を出現順に「古代から中世」「中世から19世紀」「19世紀後半から1959年」「1960年から1969年」「1970年から現在」までの５期に分け，計55種の猫種が紹介されている[23]。表１は，それら55種の猫種について，血統の出現時期，キャットショーや公認団体への登録申請が初めて行われた年，そのキャットショーおよび公認団体名，原産国を整理したものである。

ここでは，この表に沿いながら，商品生産としての猫種作りがどのように進行してきたかを整理していく。

表１　猫種一覧

猫種	血統分類	初登場年 および認定年	初登場ショー および初公認団体	原産国・地域 その他
エジプシャンマウ	古代	1980年代終盤	CFA	エジプト
ターキッシュバン	古代	1969	GCCF	トルコ
ソコケ	古代	1994	FIFe	アフリカ
マンクス	古代	1920年代	CFA	イギリス・マン島
ノルウェージャンフォレストキャット	古代	1934 1977	キャットショー・オスロ FIFe	ノルウェー
サイベリアン	古代	1871 1987	キャットショー・ロンドン ソビエト猫連盟	ロシア
ブリティッシュショートヘア	古代	1871 1887	キャットショー・ロンドン ナショナル・キャットクラブ	イギリス
ジャパニーズボブテイル	古代	記述なし	CFA	日本 1968年アメリカへ渡る
ドラゴンリー	古代	2010	CFA	中国
シャム	古代	1871 1901	キャットショー・ロンドン サイアミーズ・キャットクラブ	タイ
コラット	古代	1965	CFA等	タイ
バーマン	古代	1926 1961	キャットショー・パリ CFA	ミャンマー
ペルシャ	古代	1871 1910	キャットショー・ロンドン GCCF	イラン
ターキッシュアンゴラ	中世～近世	1890	キャットショー・ロンドン	トルコ
ロシアンブルー	中世～近世	1871 1912	キャットショー・ロンドン GCCF	ロシア
アメリカンショートヘア	中世～近世	1895 1906	キャットショー・アメリカ CFA	アメリカ
シャルトリュー	中世～近世	1930	キャットショー	フランス

22）リトヴォ，前掲書，p168-173

23）タムシン・ピッケラル2014年『世界一美しい猫の図鑑』五十嵐友子訳，エクスナレッジ

猫種	血統分類	初登場年 および認定年	初登場ショー および初公認団体	原産国・地域 その他
メインクーン	中世～近世	1860 1906	スコヘーゲン･フェア CFA	アメリカ
クリリアンボブテイル	中世～近世		種の確立中	ロシア・千島
アビシニアン	中世～近世	1871	キャットショー・ロンドン	東南アジア
タイ	～1959	2007	TCIA	アメリカ
バリニーズ	～1959	1960年代 1967	BBFA CFA	アメリカ
バーミーズ	～1959	1936 1947 1953	CFA CFA認定取消 再認定	アメリカ・ミャンマー
ヒマラヤン	～1959	1984	CFA	アメリカ
カラーポイントショートヘア	～1959	1950年代後半	CFA	アメリカ・イギリス
オリエンタル	～1959	1974	GCFA	イギリス
ハバナブラウン	～1959	1958	GCFA	アメリカ
ソマリ	～1959	1972	ソマリ･キャットクラブ	アメリカ
コーニッシュレックス	～1959	1962	CFA	イギリス
ボンベイ	～1959	1970	CFA	アメリカ
デボンレックス	1960～1969	1967	GCCF	イギリス
スコテェッシュホールド	1960～1969	1966 1970年代初頭 1978	GCCF GCFA公認取消 CFA	イギリス
ラグドール	1960～1969	1966	NCFA	アメリカ
エキゾチックショートヘア	1960～1969	1967	CFA	アメリカ
スノーシュー	1960～1969	1974	CFF，ACA	アメリカ
オシキャット	1960～1969	1986	CFA	アメリカ
アメリカンボブテイル	1960～1969	1989	TICA	アメリカ
スフィンクス	1960～1969	1960年代終盤 1971 1979	CFA CFA取消 TICA	カナダ・アメリカ
トンキニーズ	1960～1969	1979	CFA	カナダ・アメリカ
アメリカンワイヤーヘアー	1960～1969	1967	CFA	アメリカ
チャウシー	1960～1969	1995	TICA	アメリカ
ベンガル	1960～1969	1977 1979	ACFA CFA，その後取消	アメリカ
シンガプーラ	1970～	1982	CFA	シンガポール・アメリカ
アメリカンカール	1970～	1983	CFA	アメリカ
ラパーマ	1970～	1995	TICA	アメリカ
マンチカン	1970～	1994	TICA	アメリカ
ネベロング	1970～	1987	TICA	アメリカ・ロシア
ピクシーボブ	1970～	1996	TICA	アメリカ
サバンナ	1970～	1996	TICA	アメリカ
ドンスフィンクス	1970～	記述なし	TCIA	ロシア
セルカークレックス	1970～	1990	TCIA	アメリカ

猫種	血統分類	初登場年 および認定年	初登場ショー および初公認団体	原産国・地域 その他
トイガー	1970～	1993	TCIA	アメリカ
ピーターボールド	1970～	1996 1997	SFF（ロシア） TCIA	ロシア
ラガマフィン	1970～	2003	CFA	アメリカ
セレンゲティ	1970～	2013	TCIA	アメリカ

＊CFA，GCFA等の認定年について詳しい記述があるものについては，チャンピオンシップ・ステイタス昇格年以前の，他のクラスでの認定年を示した。

（1）キャットショーの開催と血統登録制度の成立

表1の中で，サイベリアン，ブリティッシュショートヘア，シャム，ペルシャ，ロシアンブルー，アビシニアは1871年にイギリス・ロンドンのクリスタルパレスで行われた世界最初のキャットショーに出展されるところから，種として知られ始める猫である。リトヴォの記述にあった「猫を趣味で飼うようになったころ，ほとんどなんの値打ちもない迷い猫が，たちどころにキャットショーに出す価値のある猫に変身」したというのは，ブリティシュショートヘアのことである。この世界最初のキャットショーは作家のハリソン・ウィアーとクリスタルパレス支配人のウィルキンソンによって開催されたものである。ウィアーのキャットショー開催の目論見は「猫にも長い毛や短い毛のものがおり，黒や白だけでなく，いろいろな色や模様のいろいろな種がいることを世間に知らしめること，そして登録と認定というシステムを確立することだった」という（ピッケラル，2014：45）。なお，この世界最初のショーで優勝を果たした猫は，ウィアーのブリティッシュショートヘアであった[24]。イギリスでは，このショーの後，1887年には世界最初のキャットクラブである英国ナショナルキャットクラブが設立され，猫の血統を記録するシステムが築かれる[25]。さらに1910年にはGCCF（Governing Council of the Cat Fancy＝育猫管理評議会）が設立される。GCFCはイギリス唯一の血統登録団体の地位を，英国ナショナルキャットクラブから引き継いでいるという[26]。

一方，19世紀後半にはアメリカでもペット熱は高まっており，キャットショーが開かれるようになっていた。1895年，マジソンスクエアガーデンで開催されたものがアメリカでは最初の大規模なキャットショーだとされている[27]。しかし，メインクーンの出展はそれよりも早い1860年代のスコヘーゲン・フェアである。スコヘーゲン・フェアはメイン州の農園主たちの祭りである。この祭りでは農園主たちの自慢の猫（ネズミを獲

24）同上書，p45
25）同上書，Pp46
26）同上書，Pp119
27）同上書，Pp96

るのがうまく，美しく，性格も良い）が，州内の各地からやってきてメイン州チャンピオンの座を競い合ったという。もちろん，メインクーンは1895年のマジソンスクエアガーデンのキャットショーにも出展されている[28]。なお，アメリカにおける全米規模のキャットクラブとしては，1899年に設立されたACA（American Cat Association＝全米猫協会），1906年に設立されたCFA（Cat Fancier's Association＝愛猫協会），1979年に設立されたTICA（The International Cat Association＝国際猫種協会）がある。CFAは現在では世界最大の愛猫家協会であり，TICAは世界第二の規模を誇る愛猫家協会である[29]。

また1949年にパリで設立されたFIFe（Federation Internationale Feline d' Europe＝国際猫種協会）はおよそ40カ国にまたがる40数団体が登録する連盟であるという[30]。

（2）幻想としての猫種

『世界で最も美しい猫の図鑑』中，最も血統の古い猫として登場するのはエジプシャンマウである。エジプシャンマウの血統は以下のように紹介される。

> 祖先の記録が残っている種は少ないが，エジプシャンマウはその数少ないうちの一つだ。紀元前1900年頃以降の古代エジプトでは斑点模様の猫がさまざまな美術品に描かれている。…。このように古代エジプトではエジプシャンマウの祖先が数多く記録されているが，古代ギリシアやローマの像や絵画にも似たようなスポットを持つ猫がわずかながら登場する。…。12世紀の初め頃になると，エジプシャンマウはフランスやイタリア，スイスなどヨーロッパ大陸の国々で愛玩動物として飼われるようになった。おそらくエジプトから輸入し，繁殖を盛んに行っていたものと思われる（ピッケラル，2014：25）。

上の文章からは，エジプシャンマウは古代エジプトを起源としてヨーロッパに広まった猫という印象を持つ。しかし，エジプシャンマウとして血統を登録される希少な猫として抽出されるものと，「エジプトからヨーロッパに広まる」という前史とは断絶がある。

すなわち，現在のエジプシャンマウは「第一次世界大戦中に繁殖数が激減し，第二次世界大戦の終戦間際には絶滅の危機に瀕するほどになった。種として生き残ることができたのには，ロシアの亡命貴族ナタリー・トルベツコイの功績が大きい。当時イタリア

28）同上書，Pp23
29）同上書，Pp119
30）同上書，Pp18

に住んでいたトルベツコイが，1950年代初頭に行ったエジプト旅行の際にこの種と出会い，２匹を独自の外交ルートに乗せてイタリアに輸入」するところから始まる。この時トルベツコイが手に入れたエジプシャンマウはルルという雌，グレゴリオという雄であり，さらにゲッパという雄を手に入れる。トルベツコイは1956年にこの３匹を連れてアメリカに移住し，キャテリー（猫の繁殖・飼育を行う施設）を設立する。この３匹から生まれたものが正当のエジプシャンマウの血統であるというのである[31)]。

但し，３匹をもとにした繁殖では遺伝子プールが小さすぎるため，十分な繁殖を行うことができない。そこで当初はエジプトからの猫の輸入ができなかったため慎重に異種交配を重ねた。さらに，1980年には，インド，ニューデリーの動物園からエジプト原産の２匹の猫，トビーとタシを輸入し，遺伝子プールの拡張をはかる。こうして，安定的に子猫の供給ができるようになった1980年代の終わりに，CFA（American Cat Association＝全米猫協会）から猫種として公認を受けることになる[32)]。

さて，エジプシャンマウなる猫種は一体どのようなものと言えるのか。エジプシャンマウを古代エジプト猫の血統を受け継ぐ猫とするには，それを保証するものは何もない。また，そのような猫があるとしても，それらの猫は年月の積み重ねの中で多様な模様や色を持つ他の猫たちと異種交配を重ね，現在に至っているであろう。現在のエジプシャンマウは，ルル，グレゴリオ，ゲッパこそエジプシャンマウであるとしたトルベツコイの幻想の上に成り立っており，さらにはその遺伝子プールを拡張し安定的に供給可能な商品になった時に成立したと言える。この意味で，リトヴォが「猫の種類の大半は生物学的に作られたものではなく，言葉によって作られたものである」と述べていることは，まさにその通りなのである。だが，第二次大戦以降には，文字通り生物学的にも新種の猫が生産されていくことになる。

（３）新種の猫を作る

表１の原産国に注目してみると，血統分類として古代，中世～近世とされるものは，アメリカ，イギリスの外，エジプト，タイ，ミャンマー，トルコなど，多岐に渡っている。ところが，「19世紀後半から1959年」「1960～1969年」「1970～現在」では，大きな偏りが見られる。個別にみていくと，「19世紀後半から1959年」では，アメリカ５種，イギリス２種，アメリカ・イギリス１種，アメリカ・ミャンマー１種である。「1960年～1969年」ではアメリカ８種，イギリス２種，カナダ・アメリカ２種である。「1970～現在」ではアメリカ９種，ロシア２種，シンガポール・アメリカ１種，アメリカ・ロシア１種である。要するに19世紀後半から現代までに出現した種のうち22種がアメリカで

31）同上書，p26
32）同上書，p26

出現しているのである。イギリスでも４種が出現しているが，1970年以降にはない。逆に，1970年以降にはロシアから新しい種が２種出現している。このように猫種の原産国が偏る理由としては，交配が計画的に行われるようになったことと関わりがある。

ピッケラルによると，第二次大戦後，新種の猫の開発が盛んに行われるようになったという。その主たる理由は「遺伝子への理解が深まったことと，体型や被毛の長さなどのタイプを選んで交配させるという概念が根付いた」ことであった[33]。この時期にはシャムのカラーバリエーションを増やすために交配を重ねた結果としてカラーポイントショートヘア，オリエンタルなどが生み出されたり，ペルシャとシャムの交配によってヒマラヤンが創りだされたりした[34]。

1960年代になると，異種交配，突然変異の人為的操作などの技術が加わる。異種交配では野生のヤマネコとイエネコの交配が行われ，ベンガルやチャウシーなどの猫種が作りだされた。突然変異の人為的操作による種の固定が行われたものとしてはスコテェッシュフォールド，アメリカンワイヤーヘア，デボンレックス，スフィンクス等があげられる。さらに1970年代以降には，異種交配を計画的に行う計画交配によって，さらに多くの種が創りだされている[35]。

こういった新種づくりにおけるCFA，TIFA等の愛猫家協会の役割は，新種としての認定と登録である。たとえば，テェッシュフォールドは，スコットランドの農場の納屋で見つかった折れ耳の雌猫がそのもととなっている。この猫・スージーと，スージーが生んだ子の一匹，やはり折れ耳のスヌークスの種を確立するために計画交配が行われた。この交配はスージーの遺伝子をいかに発現させるかを考えながら，ブリティッシュショートヘア等と掛け合わせる形で行われた。1966年にはGCFAによって公認されるが，1970年代に入ると「先天性疾患の問題に加え，耳ダニと難聴の疑いもある」という理由で登録が抹消される。これによってイギリスでは人気が一気に下落するが，アメリカでも計画交配が行われ，1978年にはCFAによって認定されるという過程を経ている[36]。また，ベンガルはベンガルヤマネコとイエネコの異種交配によって人為的に作り出された種である。ベンガルをめぐっては，それを猫種として認定していうかどうかにおいて論争が起こっている。たとえば，CFAは1979年に一旦登録を認めるが，その後，登録を抹消している。CFAは1998年には「イエネコの種の保存のため，イエネコとイエネコ以外との交配から生まれた猫を品種として公認しないと宣言」したという（ピッケラル，2014：215）。イギリスでもベンガルが紹介された1980年代後半GCCFの認定取

33）同上書，p121
34）同上書，p121
35）同上書，p160-161，p220
36）同上書，p169-170

得をめぐり論争が起こったという。現在，アメリカではTICAによって認定されているが，CFAと同様にベンガルを公認しない団体も多くあるという[37]。

スコテェッシュフォールドもベンガルも冒頭で提示したホームページ『pepy』の人気ランキングに掲載されている猫種である。新しい猫種とは，安定した数が供給できるならば日本のペットショップにさえ置かれる，そのような新商品なのである。アメリカから新種が多く生産される理由は，アメリカが現代のペット（猫）ビジネスの中心になっているためであると言えよう。

この項の最後に，現代アメリカのペット（猫）ビジネスを象徴するような例を二つ挙げておく。一つ目はラグドールとラガマフィンである。ラグドールは1966年にNCFA（National Cat Fancies Association，全米愛猫協会）に登録された猫種である。ラグドールのブリーダーであったアン・ベイカーは，「1971年に独自の猫種登録機関IRCA（International Ragdoll Cat Association，国際ラグドール協会）を創設し，ラグドールという名称の登録商標とフランチャイズ化に乗り出」した（ピッケラル，2014：174）。さらに，「すべてのラグドールのブリーダーをIRCAの支配下に置き，IRCA以外の団体への登録を認めない」とした（ピッケラル，2014：174）。ベイカーには反感も持つブリーダーも多く，1994年にIRCAから引退を迫られたジャネット・クラークマン等は，IRCAから脱退するとともに自分たちのラグドールに新たな名前を与えた。それがラガマフィンである[38]。このラグドールとラガマフィンを巡る動きからは，新種の猫種に対する独占権の形で，猫が商品であることを際立たせている。

二つ目の例は，トイガーである。トイガーは「慎重な計画交配によって作り出された，いわば「デザイナーズキャット」」だという（ピッケラル，2014：263）。トイガーの作成にあたっては，その背景が重要である。ピッケラルによれば，1980年代は，「人々が野生のヤマネコの美しい被毛に魅了され，ペットとして飼いたいと熱望していた時代」であり，実際にヤマネコを入手して飼いはじめた人もあったものの，「ほとんどがエサや手入れやしつけなど，扱いに苦労していた」時期でもあった（ピッケラル，2014：263）。さらに，ヤマネコそのものも，「毛皮を目的とした密猟とペットにするための乱獲で，野生種の数が激減」していたという（ピッケラル，2014：263）。そこで，「人々の欲求を満たしつつ，野生種を保護するという目標のもと，ヤマネコに似たワイルドな容姿を持つイエネコの作出」が計画され，できたのがトイガーだという。要するに，トイガーは消費者の求める商品として作り出された猫種であった（ピッケラル，2014：263）。

37）同上書，p215-216

38）同上書，p275

3．現代日本の猫に立ち戻って

（1）ポストモダンの猫におけるスピーシズム

ピーター・シンガーは著書『動物の解放』において，現代におけるスピーシズム（種差別）を批判する[39]。シンガーによる，現代のスピーシズムの在りようは，まず人間を中心とし，人から愛情を向けられるのは犬や猫などペットとなるような食用以外の動物であり，畜産の対象となる動物に対しては童話のような物語でさえ子どもたちの興味を引くことがないようにコントロールされている，というものだ[40]。だが，現実はもっと複雑である。人から愛情を向けられる犬や猫でさえ，その内部で価値ある犬，猫と無価値な犬，猫とに分けられる。その価値づけにおいてはやはり，犬種，猫種という弁別が用いられる。

現代における日本の猫の種による弁別は，明治時代の犬のように文化的に正しいか否かというものではない。もっと単純に商品として売れる猫かどうか，消費者が購入したい猫かどうかである。現代アメリカにおける猫種開発はこのような新商品開発として推し進められてきたのであり，多くの日本人はいわばアメリカのペット産業に巻き込まれる形で，スコテェッシュフォールドやアメリカンショートヘアを欲しがるのである。なお，これら商品としての猫は，その取扱い方法として規範的な飼い方もまた持ち込むことになる。まず重要なことは，商品として正しい手続きを経ずに自家繁殖した場合に生まれた子どもたちには商品価値はない（商品価値を生む猫を生産できるのは繁殖の管理をきちんと行うことができるブリーダーだけであり，商品価値を付与することができるのは猫種登録団体だけである）。その意味で，これらの猫は室内できちんと管理して飼われるべきものであり，きちんと不妊処置を行い一代限りの命とすることが望ましいものである。

商品としての猫の飼い方の規範化は，結果として従来の猫，すなわち野良猫や慣行的に放し飼いであった猫を周辺的なものに追いやっていく。現代のポストモダン社会においては，明治期の犬のように狂犬病のレトリックを用いて虐殺するような直接的方法で周辺化された猫を処理していくことはない。様々な言説を用いて，より可能性のある産業としてペット産業を拡大する努力を行うだけで，結果として従来の猫に居場所はなくなっていくのである。

（2）和猫の行方

この章の最後に，日本の猫，すなわち和猫に触れておく。ジャパニーズボブテイルは

39）ピーター・シンガー，2011年『動物の解放』戸田清訳，人文書院
40）同上書，p283-292

日本原産の猫種である。ならば血統書付の日本猫も保存されていると思いたくなる。だが，ジャパニーズボブテイルは私たちが目にするごく普通の和猫とは異なる。1968年にアメリカに輸入された３匹の短尾の日本猫から作り出された品種であり，さらにアメリカで交配が重ねられたため「アメリカ・ライン」と呼ばれる血統さえ築かれている[41)]。

一方，いわゆる和猫は商品としては価値のない猫である。さらに言えば，今では洋猫との混交も当たり前である。現代の私たちは，要するに商品として流通させられるより可愛い猫（この「より可愛い」もメディアを通して作られ，植え付けられたイメージに過ぎないのであるが）と引き換えに，当たり前にいた普通の和猫と，普通に和猫のいる風景を失いつつあるのである。

４．おわりに

猫はネズミを獲る能力をかわれ，世界各地で多様な形で人に飼われてきた。たとえば，イギリスでは郵政公社が近年まで，猫を「雇用」していたことは知られている。ピッケラルは，「イギリスの郵政公社では1868年から1984年の間，ネズミ問題担当の猫たちを雇っていた。その第１号は1868年９月に採用され，ロンドンにある為替部門に派遣された。給料はエサ代として週１ペニー。1873年には，それまでの任務遂行能力の高さが認められて昇進した。その話が知れわたると，イギリス中の郵便局がこぞって猫を雇うようになった」と記述している（ピッケラル，2014：119）。また，第一次大戦中の軍隊にも猫の活躍の場があった。ネズミを獲るという能力を求められて「イギリスやアメリカの海軍の艦艇や空軍の基地でも猫を常駐させて，ネズミを退治させていた」ばかりでなく，動物の持つ癒し効果が既に知られており，兵士を癒すために「第一次大戦中のイギリス軍だけでも50万匹の猫を雇っていた」という（ピッケラル，2014：120）。日本では養蚕農家がネズミ除けのために，猫を飼っていたことは知られている。ところで，日本において養蚕が重要な輸出産業に成長するのは明治以降のことである。このように考えると，最も猫が活躍した時代は，近代であったのかもしれない[42)]。これは，ちょうど犬が都市から駆除されていく時期でもある。

いずれにしても，ここからいくつかの課題が浮かび上がる。一つは，猫の近代史や社会史はまだまだ不十分だということである[43)]。また，ポストモダンにおいて，猫はネズ

41）ピッケラル，2014，p51

42）筆者の実家は米屋であり，幼少期（1960年代後半）には，ネズミ番という名目で常時猫を飼っていた。これも養蚕農家が猫を飼う時代と，ある程度重なっていたのであろう。

43）たとえば，江戸期における猫の社会的位置づけを考える上では，藤原重雄の『史料としての猫絵』は参考になる。
藤原重雄，2014『史料としての猫絵』山川出版社

ミを駆除する動物としての役割を終えた。そこで新たに付与されたのが，コンパニオンアニマル，セラピーアニマル等の役割であろう。ここにおいてもう一つの問題が浮かび上がる。すなわち，なぜ人は猫になんらかの役割を付与しつづけなければ気がすまないのか，という問題である。現代の私たちにとって商品価値以外に価値があるとは，人間に対し何らかの役割を果たすことができるということを意味している。猫に商品価値以外のものを見出すとすれば，コンパニオンアニマル，セラピーアニマルといった猫の効用を主張せざるを得なくなる。これは，有用でないもの，価値のないものは存在する必要がないという発想と表裏一体をなすものである。近現代における人の動物に対するこのような，アプリオリな支配の感情に対する問いかけも，哲学分野から行われている。この点で、ジャック・デリダの『動物を追う，ゆえに私は（動物）である』，ジョルジョ・アガンベンの『開かれ　人間と動物』などは興味深い[44) 45)]。

さらにもう一つ課題があげられる。現代社会が猫の表象で溢れかえっていることだ。ピッケラルは1970年代以降の状況について以下のように記している。

> 新しい猫種が数多く誕生したこの時代，漫画やアニメーション，映画の世界でも猫は大躍進を遂げる。1970年代には，かの有名な猫のキャラクターが誕生した。アメリカの漫画家，ジム・デイビスが1978年に生み出したガーフィールドだ。…。ハリウッドで強烈な印象を残したのは，『オースティン・パワーズ』（1977年）に登場するミスター・ビグルスワーズだろう。悪の総裁ドクター・イーブルの愛猫という重要な役どころを演じたのは，SGC・ベルフリー・テッド・ヌード＝ジェントという名のスフィンクス。ベルフリー・キャテリーのミシェル・バージに飼育され，キャットショーでもチャンピオンに輝いた経歴を持つテッドは，「猫タレント」の草分け的存在だ（ピッケラル，2014：221）。

この状況は日本でも同様である。80年代には，アメリカンショートヘアの猫，マイケルを主人公とした漫画『What's Michael』が話題になり，猫種としてのアメリカンショートヘアの知名度を高めた。今では，数えきれないほどの猫漫画がある。さらに，このようなキャラクターとしての猫ばかりでなく，スター猫も誕生している。貴志川線の駅長をつとめた「タマ」，映画『猫侍』に出演した「アナゴ」などはその代表であろう。なぜこれほど，猫の表象がメディアの中に満ち溢れるのか，これもまた現代の猫を考え

44）ジャック・デリダ，2014『動物を追う，ゆえに私は（動物）である』マリ＝ルイーズ・マレ編，鵜飼哲訳，筑摩書房

45）ジョルジョ・アガンベン，2011『開かれ　人間と動物』岡田温司，多賀健太郎訳，平凡社ライブラリー

る上では大切な問いになるであろう。

もちろん，地域猫，猫島観光等についても，個別に丁寧な調査研究が必要であろう[46]。

本稿では，猫というフィルターを通して近現代を考える研究のスタートをきったところである。今後，一つ一つの課題に丁寧に取りくんで行きたい。

参考文献一覧

アガンベン，ジョルジョ　2011『開かれ　人間と動物』岡田温司，多賀健太郎訳，平凡社ライブラリー（Giorgio Agamben, 2002, *L'aperto: L'uomo e l'animale*）

今川勲　1996『犬の現代史』現代書館

佐藤ピート　2013『ニャンクチュアリ　猫町，猫島，猫神社　猫の聖地を巡る旅』イースト・プレス。

白柳かさね　2011「宮城県石巻市田代島における猫観光の地域的背景―人間と猫の関わりに着目して」『ヒトと動物の関係学会誌』Vol.28

シンガー，ピーター　2011『動物の解放』戸田清訳，人文書院（Peter Singer, 2009, *Animal Liberation*）

スキャブランド，アーロン　2009『犬の帝国　幕末ニッポンから現代まで』本橋哲也訳，岩波書店（Aaron Herald Skabelund, 2006, *EMPIRE（S）OF DOGS: From Bakumatsu Nippon to the Present*）

総務省　2011　『平成22年度国勢調査最終報告書「日本の人口・世帯」』

ターナー，ジェイムス　1994『動物への配慮　ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』斎藤九一訳，法政大学出版会（James Turner, 1980, *RECKONING WITH THE BEAST: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*）

千葉県　2012『地域ねこ活動に関するガイドライン～地域ねこ活動の道標～』

デリダ，ジャック　2014『動物を追う，ゆえに私は（動物）である』マリ＝ルイーズ・マレ編，鵜飼哲訳，筑摩書房（Jacques Derrida, 2006, *L'ANIMAL QUE DONG JE SUIS*）

トゥアン，イーフー　1988『愛と支配の博物誌　ペットの王宮・奇型の庭園』片岡しのぶ他訳，工作舎（Yi-Fu Tuan, 1984, *Dominance and Affection: The Making of Pets*）

仁科邦夫　2014『犬たちの明治維新　ポチの誕生』草思社

藤原重雄　2014『史料としての猫絵』山川出版社

ピッケラル，タムシン　2014『世界一美しい猫の図鑑』五十嵐友子訳，エクスナレッジ（Tamsin Pickeral, 2013, The Beauty of The Cat）

真木悠介　1993『自我の起源　愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店

ましこひでのり　2013『愛と執着の社会学　ペット・家畜・えづけ，そして生徒・愛人・夫婦』三元社

南幅俊介　2015『日本全国猫島めぐり　のんびり猫旅』主婦と生活社。

山田昌弘　2004『家族ペット　やすらぐ相手はあなただけ』株式会社サンマーク出版

46）猫島観光に関する研究としては，白柳かさね「宮城県石巻市田代島における猫観光の地域的背景―人間と猫の関わりに着目して」（『ヒトと動物の関係学会誌』Vol.28, 2011）がある。

2007『家族ペット　ダンナよりもペットが大切!?』文春文庫
リトヴォ，ハリエット　2001『階級としての動物　ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』三好みゆき訳，国文社（Harriet Ritvo, 1987, *The Animal Estate: The English and Other Creatures in The Victorian Age*）
『朝日新聞デジタル』「野良猫経の不適切な餌やり禁止条例成立　京都市（2015年３月20日）」，http://asahi.com/articles/ASH3M7W7KH3MPLZB024.html，2015年12月22日接続
『animol』http://animo-animal.jp/artives/322，接続日2015年12月22日
『週刊朝日』付「住民15人に猫100匹！猫好きが悶える猫島（2013年11月11日）」http://dot.asahi.com/wa/2013110800030.htmi，2015年12月22日接続
『pepy』http://pepy.jp/900，2015年12月22日接続
『田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト』http://nyanpro.com
『楽天市場』http://review.rakuten.co.jp/item/1/202225_10000304/lia2-h4us8-9ytaa_177841046/，2015年12月22日接続